どこかおかしなヒューマンの異世界譚

くれないEX

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人は言う彼は絶対に従わない

人は言う彼は支配者だと。

人は言う彼は頭のネジがどこか飛んでいる。と。

そんな彼は突然現実とはかけ離れた異世界へ飛ばされ、異世界生活を始める。

賽は投げられた。彼の異世界冒険譚を始めよう。

目次

ハローハロー異世界編
その男、、 1
その男、、、② 8
その男、、、③ 15

ハローハロー異世界編

その男、、、

ここはとある街の市街地。
その路地裏ではある光景が広がっていた。
5．6人の柄の悪い人達俗に言う不良達、彼らは皆倒れ蹲っている中で彼らの中の一人の頭を踏みつける頭の白い男が一人。
「オイオイオイオイこんだけしか持ってないのかよ?」
彼の手には恐らく男のであろう財布が握られ
踏みつけられた男は答えられずに呻き声をあげていたが、白髪の男が蹴りを一発頭に入れると男は意識を手放しだらしなくコンクリートで固められた地面に横たわたった。
「あ～あ伸びちまったか。根性のねぇ奴らだぜ。まだのび太君でも根性あるぞ」
仕方がねぇなと言いつつ足を退けてぶんどった財布をその辺に置いてある自分の鞄にしまうと、倒れている不良達を一瞥し、路地裏を後にしてそのまま自宅への道を歩いていく。
「あ～あ退屈だねぇ」

零した言葉は誰にも聞かれなかったが、その言葉は真剣味を帯び、悲哀に満ちていた。

翌日、今日は華の金曜日と呼ばれる日付だ。
今日で今週の学校登校という名の出勤が終わりを告げる日でもある。
学生はみな、こぞって今日はカラオケへ行くだの、やれ買い物行くだの、週末の予定を立てワイワイ盛り上がる。
それを尻目に白髪の男、虹岬　雅は椅子の背もたれに目いっぱい寄りかかって教室の天井を仰ぐ。その目には退屈だと大きく書かれている程には濁っている。
「おーいそろってんな～?･んじゃＨＲ始めるぞ～席つけ～」
ガラッと教室の扉を開け教師が入って来ると、席を移動していた生徒達は自分の席へと戻って行った。
それから雅はＨＲと午前中の授業は全て寝て過ごした。
気づくと時間はお昼休みへと移行していた。
「ふぃ～あ～よく寝た～。あれ?･昼?･まじか」
寝ていた机から立ちいつもご飯を食べている屋上へと向かう。
通常どこの学校も屋上への立ち入りは禁じられている無論、この学校も例に漏れずそ

の対象になっているが、ドアの施錠を壊してあるので外へ出られるようにはなっているが、誰も屋上へは行こうとしないのでここにはいつも雅一人だけが居る。
「いい天気だ。こんな日はものすごく眠くなる」
弁当も食べ終え、屋上の床に横たわる。季節は初夏。比較的高所に位置する屋上は近くの海から潮風が流れて来るのでこの時期にはとても涼しく感じる。
そのせいだろうか横たわっている雅を眠気がゆっくりと押し寄せてくる。
気持ちいい潮風に当てられながら雅は抗うまでもなく眠気にその意識を委ねた。

ココ最近、妙な夢を見るんだ。
その夢の中で、誰かが俺を呼んでる。
こっち、こっち、って手招きして呼んでる。
普段の俺なら絶対付いてかないし、うるせーよバーカってそいつにケツバットぶちかますと思う。でも不思議とそんな気は起きない。
毎回毎回その声の主の姿は黒い霧がかかったみたいで鮮明に見えないが、何故だか嫌な気分はしないんだ。
またあの影が俺に近づいてくる…
今度こそは…

そこで夢が終わり目が覚めた。
はっきりと覚醒した意識。やがて雅は目を開ける。
その先には全く見たこともない景色が広がっていた。
空は一点の曇りもなく男が煌々と太陽が煌めき、優しいそよ風に程よい丈の草は揺れ、豊かな自然の匂いが鼻をくすぐる。
これはどういう訳だ。
さっきまでは屋上で寝ていた筈が、起きたら全く違うところにいる。
全く状況が掴めない。
「どうしてこうなった。寝て起きたら全く違う所でしたなんてライトノベルの世界だけだっつの…ん？ラノベ？…異世界…？もしかして…」
もし、もし、ここが夢の中、或いは全く違う世界つまり異世界だとしたら俺にとっては最高な世界なんじゃないか？自由に生きられるんじゃないか？
そんな疑問が雅の中で生まれる。
そこまで考えたところで、足音が聞こえてくる。
それは徐々に雅のいる方へ近づいている。
「こんなところで何してやがるんですかー!!!そんなに死にたいんですかー!?」
〝死〟と言うなんとも物騒な言葉が聞こえる。聞き間違いか？

なにはともあれ人が居た。
まずは情報を得るしかないか。
振り向くと雅は思わず絶句した。
ピンク色の肩まで伸びた髪の毛は上質な絹のような艶を放ち、やや小柄で赤いドレスのような物を身につけ、スレンダーで美しい体つきで、そこから伸びるスラリとした脚はなんとも言えない色気を放っている。さらに、若干ツリ目で強気な雰囲気を放つ少女。
そして、最も目を引くのが頭に付いた猫と犬どっちとも取れないような髪の毛の色と対応した白ピンクの獣耳と背中に背負われた背丈程もある大剣。
これを見て言葉に詰まらない者はいないだろう。それもそのはず、普通に生きていたらまず現物は見たことないし、絵や本の中の空想上のものだからだろう。
「てゆーかぁ、話聞いてますかぁ!?なーに固まっちゃってんですか!?あと、そんな初めて見ましたみたいな目しないでもらえますか?別に物珍しいものでもないじゃないですか」
「おい、女。ここは何処だ?説明しろ」
暫くフリーズしていた雅は再起動し、少女に問いかける。
「はぁ??さっきまで固まってた癖に何言っちゃってるんですか??それに、それが人にも

のを頼む態度ですか??」
「2度は言わない。状況を、説明、しろ」
　飛びっきりの笑顔を浮かべる。有無を言わせない物言いに加えて笑顔とは相反したドス黒い空気を漂わせて、説明しろ。と促す。
　その顔に威圧感を感じ、たじろぐ少女。

「わ、わかりましたよ。ここはウェイク草原です。もう少し北に行くとアレットラ王国っていう国に出ます。で、私はそこの初等魔法使いのスピカリオンです。歳は先月で15になりました。今度は私から質問です。貴方の種族はなんですか??見たところ獣人ではないようですが…」
「ご苦労。俺は虹岬　雅。歳は17、人間だ。」
「にん、げん、？人間!?ヒューマン!?マジ!?」
「うるさい。さっさとそのアレットラなんちゃらに案内しろよ。」
「痛っ!!何すんのよ!?」
　スピカリオンの後ろから雅がケツキックをかました。
「とりあえずお前の住んでるとこ行くんだよ早くしろ1．2．3…」
「わ、わかったわよ!連れてってあげるわ!!いい？丸腰なんだから私の後ろからちゃん

とついて来なさいよ？」
強引に決めつけた雅にスピカリオンはハァとため息を吐きながらアレットラ王国へ連れていくことを決めた。
「おい、敬語抜けてるぞ。くそがき。」
「ムッキィィィィ!!!」
スピカリオンはキィキィ喚くがそれを華麗にスルーして雅は進み始め、ブツブツと文句を垂れながらも先頭に立って雅は先導するスピカリオン。
人間と異世界人。奇天烈な組み合わせは出会う。出会ってしまった。
それは物語の歯車をゆっくりゆっくりと動かす出会い。
ただ言えるとすれば
彼、虹岬　雅（にじみさき　みやび）。は
ド畜生かつ空前絶後の自己敬愛者。
人呼んで俺様魔王ミヤビ。
生粋の自分至上主義である。
普通の人間ではない。

その男、、、②

アレットラ王国へ向かう雅はスピカリオンからこの世界について話を聞いていた。
「なあ、この世界はどうなってるんだ？」
「そうね、まあザックリと説明すると、この世界はは四つの大陸があってそれぞれにたくさんの国があるわ。まず、1番大きい大陸がガルジンオ大陸、次にクローエンス大陸、ヌイトラ大陸、そしてここ、ユーフィリア大陸です。ま、ユーフィリアは1番小さい大陸で、ガルジンオ以外の2つは大差ないけど、まあこれは頭の片隅にでも留めて置いてちょうだい。
ここで重要になってくるのが、各大陸の勢力よ。各々の大陸はお互い対立しあってるわ。今は休戦協定を結んでいるけど、しょっちゅう小競り合いが起きてる。まあユーフィリアは1番勢力が小さくて比較的温厚な位置関係ね。ここまでは大丈夫かしら？」
「ああ。（スケールがなんかでかいな。アメリカと中国とロシアとヨーロッパ諸国みたいな感じか？）」
詳しいとは言えないがザックリとした説明でも今現在ここはどういう状況にあるのかある程度は把握した。

その上である質問を投げかける。
「オイ、お前はさっき初等魔法使いとか名乗ったな。この世界はひょっとして魔法があんのか？」
「当然。この世界には魔法は無くてはならないものだもの。生活にも使われるし、戦いにも使われるわ。」
「じゃあよ、魔法なんて便利なもんあんのになんで馬鹿でかい剣背負ってんだ？」
当然の疑問。
魔法なんてものがあったら戦いに魔法を使えば良い。恐らく想像上の魔法ならば遠距離からの攻撃も可能な筈だろう。
「ああ、これね。魔獣用よ。魔獣用。」
「魔獣？」
「そ、魔獣には魔法、効かないのよ。」
その通り。
この世界には魔獣なる存在が居る。
ただの化け物ではない。魔獣は魔法の耐性が高く、並の魔法は通用しない。
国の外にはうようよ魔獣が居る。

通常、外で魔獣と遭遇した場合は手持ちの武器による物理攻撃で対処するのがセオリー。
なので、外に出る者は常に武器を携帯しているのだ。
それは聞いた雅は、ほーん。とか、ほうほう。とかあまり興味のない様子で聞いていたが、反応とは裏腹にやたらニヤニヤした様子。どうしたのだろうか。
「あんたなんでそんなニヤニヤしてんのよ」
「いや、なんでもねぇ」
スピカリオンは気になるが、追求する程でもないと結論づけた。
そういえば。と話を切り替える。
「こっちの世界の話よりあんたの世界の話を聞かせなさいよ」
「俺の世界だ?俺の世界は説明するまでもねぇつまんねぇ世界だよ」
先ほどとは打って変わってなんの感情もこもってない無表情を浮かべる。
その時。ボコォと大きな音を立てて地面が盛り上がった。
「止まって!!」
土煙が辺りに舞う。スピカリオンは雅に静止を促す。２人はそれぞれ違う反応をしている。スピカリオンはギリっと険しい表情に。
雅はポカーンと何が起きたかわからない様子。

土煙が晴れるとそこには大きな百足とカマキリを足して割ったような不思議な生物が居た。
生き物は2人を認識すると前足の鎌で攻撃してきた。
その攻撃を背中の大剣を盾のようにして鎌を防ぐスピカリオン。
だが衝撃を殺しきれずに数メートル後退する。
「グッ…!!こいつは《ハンドレグルス》!?なんで対処ランクBの魔獣がこんなところに!?」
考える暇を与えないためか、キシャァァァと雄叫びのようなものをあげ、反対の鎌で切りつけてくる。
それをサッとバックステップして避ける。
武器を持たない雅に向けて言う。
「あんたは逃げなさい!!武器を持たない丸腰のあんたじゃ足で纏いよ!その辺に逃げてなさい!!ちょっと、聞いてん…の?あれ?アイツどこいった!?」
鎌の連続で飛んでくる攻撃をすんでのところで躱しつつも消えた雅を探す。
生物の後ろあたりからハーイいーち、にーい!さーん!よーん!と。声がする。
「ちょっと何してんの!?」
雅がどこから出したかも分からないバットで生物の背中あたりの甲殻にバットを何

度も振り下ろす。すると見るからに硬そうな甲羅にはピシりと音を立てて筋の様なヒビが入っていた。
　固まるスピカリオン。
「あ？何って見りゃわかんだろけつバットだよけつバット。でもこれケツないよなじゃあ背中バット？」
「何わけのわからないこと言ってんのよ!?マジで早く逃げなって!!?」
　訳が分からない。意味がわからない。誰だって今みたいなことをされればそうなるのは必然だ。
　甲羅を破られた事に怒ったのか生物は口から赤白い息を荒く吐きながら2人に向かって突進してくる。
「おいちょっとそれ借りんぞ」
　スルリとスピカリオンの手から大剣が消えた。否、大剣は雅が持っていった。
　そして、突進してくる鎌をサッと避け鮮やかなステップで回転を加えて生物の真横に移動する。
「けつバットくらいで怒ってんじゃあねェよォォォォ!!ケツも背中も全部くっついてるじゃあねぇかァァァァ!!!
　オルァ!!!!!!くたばれ糞虫がァ!!!」

一閃。真横からの斬撃は見事なまでに生物の胴を両断した。
断面から青紫色の血のような汁の様な体液が噴き出し雨のように降り雅の白い髪を染める。
「うわっ、脆いなぁ根性ナシかよ」
ゲシゲシと両断され、既に絶命している生物を足蹴にする。
その様を口をあんぐり開けてただただ見るスピカリオン。
「あんた一体何者よ…」
「あぁ?なんか言ったか??」
「…なんでもないわよ。てかそれの血早く落としなさいよ。乾くとクッッッサイわよ?」
「まじ?」
既に乾き始めている腕を己の鼻に近づけていく。すると、みるみる顔が歪んでいく。
「くっっっっっっっっっせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!!」
心の底からの咆哮。
恐らくほんとにとんでもなく臭かったのだろう。
既に物言わぬ死体と化している生物の亡骸を八つ当たりするかのように再度足蹴に

しスピカリオンが止めに入るまでずっと蹴っていたのは完全なる余談だ。

小さなトラブルを無事？乗り越え２人は王国へ向かって更に歩を進める。

果たしていつになったら王国につくのだろうか？

心配になってきたところである。

その男、、、③

アレットラ王国

ユーフィリア大陸の最東部に位置し、貿易商が国益の大半を占めている。また、貿易だけでなく、鍛治工や、漁業、農業なども盛んに行われいる商業国だ。

故に、争いを好まず、自ら戦争や小競り合いには参加せず、自衛の軍しか持たない。

ここに住まう人々は皆活気に溢れそこかしこから客引きの声や、商談の声が聞こえてくる。

さらに言えばアレットラ王国はユーフィリア王国で一番大きい国だ。

最も、ユーフィリア大陸自体が四大陸の中でも1番小さいので他の大陸の国に比べると数段見劣りするが、それでも国民たちは自分たちの仕事に誇りを持って毎日を送っている。

雅たちはアレットラ王国唯一の出入り門の前に来ていた。

出入り門は木製で、かなり大きい造りになっている。

門の前で番をしている自衛軍のシンボルがついている鎧を身につけた騎士にスピカリオンが近づく。

「ご苦労様でございます。初等魔法使いのスピカリオン＝ウィンザーです。国外探索から帰還しました。門の開閉をお願い致します」
「ご苦労様です。通行許可証と、魔法行使証（マジックカード）を拝見させていただいてもよろしいでしょうか？」
魔法行使証。通称、マジックカードとは、訓練魔法使い以上の魔法使いに携帯が義務付けられているもので、謂わば運転免許証のようなものだ。
通行許可証に関しては言わずもがな門の出入りに必要不可欠なもの。
二つの提示を求められたスピカリオンはドレスの懐から二つのカードを出した。
それを確認した騎士は自身の体を黄色いオーラで包見込むとそれに呼応するかのように門がギギギギと音を立てて開く。
「通行許可証、魔法行使証共に確認致しました。ちなみにそちらの御仁は？」
「こいつは私の友人よ。ちゃんと申請も通してあるわ」
「そうですか。失礼致しました。では、ごゆっくりと。そちらの御仁もごゆっくりどうぞ」
騎士は雅を一瞥すると流れるような動きで一礼し、外を向いた。
もちろん、雅の通行許可など降りていないし、スピカリオンが言った申請も降りているというのも真っ赤な嘘だ。

それでもこの世界はどの国も共通で、魔法使いは何においてもどの職業よりも上位に立つ存在と認識されているため、例え初等魔法使いのスピカリオンと言えどそこらの人よりかは立場が上なため、客人で通ってしまった。

「案外すんなり入れんのな」

「当然よ。魔法使いは全ての職業の頂点に立つ立場。余程の事がない限り咎められないわ」

「そういうモンなのか」

門を通るとすぐに大通りに出た。そこには大勢の人でごった返していた。門を出てすぐにはこの国一番のメインストリートであるフローリア通りに出る。

フローリア通りはこの国で1番露天商が多く、他国からの観光客も多く訪れる場所だ。

「おぉ〜」

フローリア通りの人の多さに感嘆の声を上げる雅。日本の東京でも人混みは見慣れているがそれ以上の人の多さに少々呆気に取られている感じだ。

「ちょっと。惚けていないでついてくる!」

「ハイハイハイハイ。んで?どこ行くんだよ?」

スピカリオンに襟首を捕まれ引きずられる。

ズカズカと大通りを歩きしばらくすると現実世界と比べられないほどの規模のものすごく大きい建物が見えてくる。
アレットラ国立魔法技術研究所と、大きく書かれた門を潜る。
広大な敷地にはグラウンドは元より魔法訓練に使われるであろう物がたくさん置いてある。
例えば、等間隔で埋まっている丸太。
丸太から約２０メータ程離れた場所に印が掘られている。
これは、魔法のコントロールを訓練する為のものだ。離れた場所からでも的確に的に当てられるように正確性を鍛えるためのもの。
例えば、砂場。一見なんの変哲もないバーベルが不規則に何個も置かれている。が、このバーベル。重さは１０ｋ、１００ｋ、１０００ｋ。と
かなりの重さを持っている。
これは、魔法で操り、魔法で操ることができる重さを鍛え、威力を上げるためのもの。
このように、訓練の内容に合わせた様々な物がここにはある。
余談だが、訓練用の物が置かれているこのグラウンドの奥を行けば、これまた大きなプールがあったりする。
「(割と広いな…おっ？あそこに置いてある木剣なんて使えそうだな)」

辺りを見回して雅がニヤニヤしだす。
流石に慣れたのかスピカリオンは軽くスルーし進んでいく。
建物に入りひたすら広い廊下を突き進む。
行き止まり。否、扉だ。
「着いたわよ。これから局長。つまり、ここのトップに会うわ」
「俺の報告か？」
「まあ、それもあるけど大体は探索の結果報告をするだけよ。まあ結果報告って言ってもそんな大層なもんじゃないけどね。……
失礼します。初等魔法使いのスピカリオン＝ウィンザーです。国外探索の結果報告に参りました」
数度ノックをすると、中からは～い。と聞こえてきた。中に入り一礼。
部屋は狭すぎず、広すぎずと丁度いい広さで所狭しと、部屋中央のデスクや床には本や書類が積み上げられていて軽く山になっている。その中からのそのそと、這い出てくるは金髪のエルフの麗人。中性的ではあるがれっきとした男性。長い髪を後ろで束ね、目元に隈を携えた男。おまけに、微妙だが無精髭もある。
彼は頭を書きながらデスクの椅子に座った。
「いや～悪いねスピカちゃん。ご苦労さん。おや？そちらの男性は？」

「局長、まずは結果報告の方を。後で話しますんで」
「ん、りょーかーい。さあ、聞こうか」
「はい。まずはこれを。」
　スピカリオンは懐のドレスから一つの石を出した。その石を見ると局長は目を細め、ほぉ～これは～と感嘆の言葉を漏らす。
「(どこにしまってんだよ。入れとくスペースないだろうが)」
「これはどこで?」
「ウェジーナ洞窟の周辺で見つけました」
「なるほどね～これは後で解析しとくよ～ウェジーナって言ったらつい先日原因不明の異常魔力を検出した場所だしね。何か原因が分かるかもしれないし。ありがとうね。
　で、そこの男性は?」
「局長驚かないでください。こいつ人間です」
「どうも人間です。虹岬　雅で～す。」
　シレッとした感じで返す。
　隣のスピカリオンは頭に手を当てて、ため息を吐く。
「なるほど、人間ね…人間ねぇ…ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!????人間かい!?ほんとに人間なのかい!?」

「うん。まあそうですね」
　驚愕。それ以外の言葉では今の彼の表情は表せない程にそれで満ちている。
「ま、まさか本当に人間が、存在するとは……申し遅れたが、私はここの局長をしているドゥスルバード＝デ＝モルグだ。気軽にモルグさんとでも呼んでくれ。」
「お、おうよろしく。なんでそんなに驚いてんだ？」
「スピカちゃんから聞いてないのかい？
　人間と言う存在はこことは別の世界にいるとされていて、伝説上でしか存在が明かされていない。少なくとも人間がこの世界に居る。なんて記録は一切ないからね。こっちの人達からしたら驚くのも無理はないだろうね。ミヤビ君と言ったね、行く宛はあるのかい？」
「いんや、ないけど？」
「だったら、とりあえず今日はスピカちゃんの家に泊まりなさい。明日には君の住む所を用意しておくから」
「え!?ちょっと局長!!あたしがなんでこいつなんかと!?」
「いいじゃない。緊急事態だし勘弁してくれよ。じゃスピカちゃん頼んだよ～」
　話終えるとモルグはまた書類の山に沈んでいった。モルグと言う男は一度決めたらテコでも動かない男だ。

それを知っているスピカリオンは、観念したのか自宅へと向かう。
「ハァ…。こっちよ。付いてきなさい家へ案内するわ」

モルグの部屋を後にし、また長い廊下へ戻る。
時間帯は既に夜の時間帯に入っており、廊下の窓から見える月は淡い光で雅を照らす。
まだ、雅の異世界生活1日目は始まったばかりだ。